

## 4. 学会発表

### 4. 1. 国際学会

1. Imai R, Osumi M, Ishigaki T, Morioka S  
Relationship between pain and hesitation of movement initiation in acute phase after surgery  
The 10th Congress of the European Pain Federation EFIC® 2017. Copenhagen  
本研究では、術後患者の心理的要因を客観的に評価した。その結果、運動の切り返しに要する時間、すなわち運動の躊躇時間は心理的な影響を受けやすい運動学的指標であることが示唆された。
2. Katayama O, Osumi M, Nishi Y, Takamura Y, Kodama T, Morioka S  
The influence of sensorimotor incongruence on dysesthesia and motor control.  
The 10th Congress of the European Pain Federation EFIC® 2017. Copenhagen  
感覚-運動の不一致が主観-身体運動-脳活動へ与える影響を明らかにすることを目的とした。その結果、異常知覚が多数惹起され、両手協調運動時の運動正確性の低下、 $\beta$ 波帯域での前補足運動野の活動性の低下が生じることが明らかとなった。
3. Ishigaki T, Imai R, Morioka S  
Association between Unintentional Interpersonal Postural Coordination Produced by Interpersonal Light Touch and the Intensity of Social Relationship  
Cognitive Neuroscience Society 2018 Meeting. Boston  
相互で指先を用いた軽い身体接触を行うことで示される暗黙的な二者間姿勢協調が、二者間の社会的関係性と関係するのかを検討した。社会的関係性の評価には複数の心理尺度を用い、主成分分析により「親密値」を算出した。そして、階層線形モデリングを用いて二者間姿勢協調と親密値との関係を分析した。結果、二者間の姿勢協調と親密値には有意な関係が認められた。これより、身体接触を介した暗黙的な二者間姿勢協調を変調する機能として、親密値という社会心理学的要因が関与していることが明らかとなった。

4. Hayashida K, Nishi Y, Osumi M, Morioka S  
Effects of sharing goals with others on sense of agency and motor performance  
Cognitive Neuroscience Society 2018 Meeting. Boston  
目的共有によって生じる運動主体感が運動学習効果に関連するという仮説を立て、運動主体感を定量的に評価する手続きである *intentional binding* 課題を作成し、その仮説を検証した。その結果、目的共有によって運動主体感を運動学習効果が促進されることが示唆された。
  
5. Morioka S, Hayashida K, Nishi Y, Osumi M, Nobusako S  
Sense of agency and motor performance are stronger when an individual is capable of motor prediction.  
Cognitive Neuroscience Society 2018 Meeting. Boston  
リハビリテーションに重要な意味をもつ知覚運動学習課題中の運動主体感と運動予測の関係を実験的に検証した結果を報告した。

## 4. 2. 国内学会

1. 森岡 周, 大住倫弘, 坂内 掌, 石橋凜太郎, 小倉 亮, 河野正志  
脳卒中片麻痺上肢における運動イメージ能力と運動機能ならびに身体使用頻度との関係  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
脳卒中片麻痺患者の運動イメージ能力を両手干渉タスクによって定量化し, 運動麻痺の重症度と麻痺側使用頻度との関係を横断的に調査した. 運動イメージ想起能力が高い症例ほど, 麻痺肢を日常生活で使用していることが明らかになった.
2. 松尾篤, 冷水誠, 前岡浩, 奥田彩佳, 小寺那樹, 堀めぐみ, 山田悠莉子  
無意識の表情識別で本物の笑顔を見抜く  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
本物と偽物の笑顔表情画像をペア提示して単純に注視した際, 偽物の笑顔に対して, 本物の笑顔に対する注視時間が長くなることが示された. 一方, 疼痛表情画像ではそれらの結果は認めなかった.
3. 冷水誠, 岡田洋平, 前岡浩, 松尾篤, 伊東剛志, 松川広紀  
他者との協力関係が上肢運動学習に与える影響  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
新たな運動を学習する際に, 他者との協力関係を築きながら練習することの効果を検証した結果, 個人と複数名での条件によって学習効果に差は認められなかったものの, 3 名にて取り組んだ群では練習時の協力関係が良好であった被験者ほど高い学習率を示しており, 他者との協力的関係を構築することが学習を促進する可能性が示唆された.
4. 前岡 浩, 松尾 篤, 冷水 誠  
情動喚起画像を使用した痛み軽減アプローチの検証—心拍変動による自律神経機能評価—  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
情動喚起画像内の「痛み場面」を自身の手で消去することが痛みの情動のおよび認知的側面のどちらに対する影響が大きいかを自律神経機能評価を加え検証した. その結果, 痛み閾値と耐性の増加, 痛み刺激に対する強度と不快感の低下, 自律神経評価における LF/HF の低下を示し, 痛みの情動的側面へ影響を与えることで疼痛や不快感が軽減した可能性が示唆された.

5. 信迫悟志, 石橋凜太郎, 河野正志, 富永孝紀, 宗宮ゆりえ, 奥埜博之, 座間拓郎, 大住倫弘, 嶋田総太郎, 森岡 周  
脳卒中後失行症における多感覚統合障害の検証ー視覚フィードバック遅延検出課題を用いた検討ー  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
脳卒中後失行における多感覚統合機能障害について, 映像遅延課題を用いた調査結果について報告した.
6. 信迫悟志, 坂井理美, 辻本多恵子, 首藤隆志, 西 勇樹, 浅野大喜, 古川恵美, 大住倫弘, 嶋田総太郎, 森岡 周, 中井昭夫  
発達性協調運動障害における内部モデル障害の検証-視覚フィードバック遅延検出課題を用いた検討ー  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
子どもの手運動の不器用さに影響する因子について, 様々な課題やバッテリーを用いて検討した結果を報告した.
7. 大住倫弘, 西 祐樹, 住谷昌彦, 森岡 周  
感覚閾値以下のランダムノイズ振動刺激が触覚機能に及ぼす影響  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
ヒトの体性感覚閾値の計測で最も信頼性の高いとされている恒常法を用いて, ランダムノイズ刺激が体性感覚機能へ与える影響を心理物理的に検証することを目的とした. その結果, ランダムノイズ刺激付加によって触振動刺激を検出するパフォーマンスの向上が認められた.
8. 上田将吾, 信迫悟志, 森岡 周  
名詞の視覚提示が上肢の把持・挙上動作の力学的制御に及ぼす影響ー名詞重量錯覚課題による検討ー  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
視覚情報からの予測的な運動制御を反映するとされる材質重量錯覚課題のパラダイムを用いて, 名詞の視覚提示が運動制御へ与える影響を検討することを目的とした. 結果, 名詞の視覚提示は運動制御に影響を与え, 運動力学的パラメータである負荷力が変調された.

9. 田中 創, 西上智彦, 今井亮太, 森岡 周  
変形性膝関節症保存例における多角的評価の因子構造—理学療法初期評価時の痛みに着目した因子の検討—  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
変形性膝関節症患者における初期評価時の痛みに着目した多角的な評価の因子構造を検討した. その結果, 「破局的思考」, 「痛み関連能力障害」, 「加齢変化」, 「性差」, 「自己身体知覚」, 「自己効力感」が変形性膝関節症患者の初期評価時の必要な評価項目であることが示唆された.
10. 片山 脩, 大住倫弘, 高村優作, 西 祐樹, 森岡 周  
感覚—運動の不一致による異常知覚と身体運動への影響  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
病的疼痛の要因の一つとされる感覚—運動の不一致が身体運動へ与える影響を明らかにすることを目的とした. その結果, 感覚—運動の不一致により異常知覚が惹起され, 両手協調運動時の運動正確性が低下することが明らかとなった.
11. 今井亮太, 大住倫弘, 森岡 周  
橈骨遠位端骨折術後患者に対する腱振動による運動錯覚が ADL (Activities of Daily Living) に与える効果  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
橈骨遠位端骨折術後患者に対する腱振動刺激による運動錯覚を惹起させることで痛みが軽減することは明らかにされている. 本研究では, ADL に効果があるか検証した. その結果, 運動錯覚を惹起させなかった群よりも, 運動錯覚を惹起させた群の方が ADL の改善が認められた.
12. 石垣智也, 森岡 周  
対人ライトタッチを用いた立位姿勢動揺における協力的な身体同調課題は暗黙的な身体同調を増加させる  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
立位姿勢にて二者間で軽い身体接触 (対人ライトタッチ) を行うと, 両者の姿勢動揺が暗黙的に同調することが知られている. 本研究では, 対人ライトタッチにて, 明示的かつ協力的な姿勢動揺の同調課題を行うことで, その後の暗黙的な同調が増強することを示した.

13. 浅野大喜, 信迫悟志, 森岡 周  
脳性麻痺児の非言語的知能の発達レーヴン色彩マトリックス検査による分析  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
レーヴン色彩マトリックス検査を脳性麻痺児に適用し, その発達について定型発達児と比較した. その結果, 脳性麻痺児の非言語的知能の発達は定型発達児よりも遅く, エラー分析の結果から, 定型発達児とはエラーの種類が異なることが明らかとなった.
  
14. 佐藤剛介, 三上 亮, 大住倫弘, 信迫 悟志, 森岡 周  
経頭蓋直流電気刺激と有酸素運動の併用介入が脊髄損傷後の神経障害性疼痛および安静時脳波活動に及ぼす影響—脊髄損傷者 2 名による予備的検討—  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
脊髄損傷後の神経障害性疼痛に対する経頭蓋直流電気刺激と有酸素運動の併用介入の効果を検討した. 併用介入時には, 単独での介入と比較して早期から鎮痛効果が認められた.
  
15. 林田一輝, 西 祐樹, 大住倫弘, 森岡 周  
目的共有が運動主体感と運動学習を促進する  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
目的共有によって生じる運動主体感が運動学習効果に関連するという仮説を立て, 運動主体感を定量的に評価する手続きである **intentional binding** 課題を作成し, その仮説を検証した. その結果, 目的共有によって運動主体感を運動学習効果が促進されることが示唆された.
  
16. 水田直道, 田口潤智, 笹岡保典, 堤万佐子, 中谷知生, 山本洋平, 藤井慎太郎, 高村優作, 森岡 周  
脳卒中患者における歩行の **Trailing Limb Angle** の構成因子  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
脳卒中患者における歩行の **Trailing Limb Angle(TLA)** に影響する要因を運動麻痺の重症度や感覚障害, 筋緊張, 下肢筋活動, 歩行の自己効力感の側面から検証した. その結果, **TLA** は歩行速度や立脚後期における足関節底屈筋活動と関連した. 一方で, 運動麻痺の重症度との関連は示されず, 運動麻痺が軽度である症例においても **TLA** が低値を示す症例が認められた.

17. 西 勇樹, 大住倫弘, 信迫悟志, 森岡 周  
慢性疼痛患者における交感神経変動と内受容感覚の関係性  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
慢性疼痛患者における内受容感覚の精度と疼痛刺激による交感神経活動の変動の  
関係性を調査した. その結果, 慢性疼痛患者は安静時と比較し, 疼痛刺激中に交感  
神経活動の上昇を認め, その交感神経活動の変動が生じやすい者は内受容感覚の  
精度が低値を示した. つまり, 慢性疼痛患者は内受容感覚による自律神経活動の調  
整が破綻していることが示唆された.
  
18. 首藤隆志, 西 祐樹, 信迫悟志, 森岡 周  
運動観察干渉効果とミラーニューロンシステムとの関連性  
-脳波を用いた検討-  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
自動模倣機能の定量的指標として用いられる運動観察干渉効果が, 実際にミラー  
ニューロンシステム活動を反映するか否かについて脳波を用いて検討した. その  
結果, 干渉効果がミラーニューロンシステム活動の行動学的指標となり得ること  
が明らかとなった.
  
19. 高村優作, 藤井慎太郎, 大松聡子, 生野公貴, 田中幸平, 万治淳史,  
富永孝紀, 阿部浩明, 森岡 周, 河島則天  
能動的注意と受動的注意からみた半側空間無視の病態特性  
-空間性・非空間性注意を含めた包括的評価の試み-  
第 52 回日本理学療法学会. 2017. 幕張  
半側空間無視の病態を空間性注意機能および非空間性注意機能の双方から包括的  
に評価し, 無視症状を発現させる機序の多様性について報告した.
  
20. 岡田洋平, 芝本千晴, 大住優香里, 竹内里帆, 浅野千尋, 鍋島祥男,  
森岡 周, 庄本康治  
書痙患者一症例における経頭蓋直流電気刺激と運動観察, 筋電図バイオ  
フィードバック併用の試み  
第 54 回日本運動障害研究会. 2017. 東京  
感覚運動皮質を抑制する経頭蓋直流電気刺激と健常者の書字動作の運動観察, 筋  
電図バイオフィードバック練習の併用により, 書痙症状が軽減した症例について  
報告した.

21. 渕上 健, 森岡 周  
脳卒中後の足関節背屈障害に対する運動観察治療と電気刺激治療を併用した介入の試み  
第 29 回大阪府理学療法学会. 2017. 大阪  
脳卒中片麻痺患者の麻痺側足関節背屈障害に対して, 運動観察治療と電気刺激治療を併用したシングルケーススタディを実施した. 基礎水準期に比べ, 操作導入期に足関節背屈筋力や歩行速度, イメージ能力に改善を認めた.
22. 大松聡子, 高村優作, 藤井慎太郎, 森岡 周, 河島則天  
脳損傷後に生じる『半側空間無視』の特徴  
—動画提示時の視線分析を通じて—  
第 11 回 MotorControl 研究会. 2017. 名古屋  
動画提示時の半側空間無視患者の視線特性に関して検討した. その結果, 有意な右視線偏向や総移動距離の低下は認めしたが, 静止画像提示時に認めた視線移動速度の左右方向の低下は認めなかった. これらの結果は, 外発的に視線行動を変化できる可能性を示している.
23. 大松聡子, 高村優作, 藤井慎太郎, 森岡 周, 河島則天  
左右反転動画を用いた半側空間無視症状の定量的評価 (第二報)  
—回復過程に伴う注視点の変化—  
第 51 回日本作業療法学会. 2017. 東京  
動画提示時の半側空間無視患者の視線特性とその回復過程に関して検討した. その結果, 机上検査ではカットオフ値以上と改善を認めた症例においても, 動画視認中の右視線偏向が残存する症例を認めたことから, 机上検査において検出困難な側面を抽出できる可能性が示された.
24. 片山 脩, 西 祐樹, 大住倫弘, 高村優作, 兒玉隆之, 森岡 周  
感覚—運動の不一致による異常知覚と身体運動への影響  
—行動学および神経生理学的検討—  
第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会. 2017. 神戸  
感覚—運動の不一致による主観-身体運動-脳活動への影響を明らかにすることを目的とした. その結果, 感覚—運動の不一致により異常知覚の惹起, 両手協調運動時の運動正確性の低下,  $\beta$  波帯域での前補足運動野の活動性低下が生じることが明らかとなった.



25. 西 祐樹, 大住倫弘, 信迫悟志, 森岡 周  
痛み関連回避戦略の心理学的特性  
—恐怖条件付けに基づく行動選択パラダイムを用いて—  
第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会. 2017. 神戸  
過剰な回避では痛み-恐怖の概念化が生じた一方で, 代償的回避では概念化が生じ  
なかった. このことから, 代償的回避によって活動量を維持することは, 痛みの誤  
認識を防ぐ対処戦略であることが示唆された.
26. 山道菜未, 森岡 周  
固定点と対人ライトタッチ効果の立位姿勢動揺特性  
—周波数成分に着目して—  
日本健康行動科学会 第 16 回学術大会. 2017. 札幌  
固定点に指先接触するライトタッチと, 対人で指先接触する対人ライトタッチの  
立位姿勢動揺特性の違いについて, 足圧中心の周波数成分に着目し検討を行った.  
ライトタッチ条件は高周波, 対人ライトタッチでは低周波(コントロール条件同様)  
成分を多く含み, 物とヒトに接触する際の姿勢動揺特性の違いを示した.
27. 高村優作, 藤井慎太郎, 大松聡子, 森岡 周, 河島則天  
脳損傷後に生じる半側空間無視の特徴  
—損傷領域による症状特性の相違について—  
生理研研究会 2017 認知神経科学の先端「意識の脳内メカニズム」. 岡崎  
半側空間無視の病態のサブタイプ分類を行った結果を報告し, 「認識できない」と  
いう病態は同一であっても, その背景にある機序および神経基盤が異なることを  
示した.
28. 大松聡子, 高村優作, 藤井慎太郎, 森岡 周, 河島則天  
脳損傷後に生じる『半側空間無視』の特徴  
—画像提示時の視線分析を通じ—  
生理研研究会 2017 認知神経科学の先端「意識の脳内メカニズム」. 岡崎  
静止画像提示時の半側空間無視患者の回復過程に関して検討した. その結果, 無視  
患者は有意な視線の右偏向を認めたが, 発症からの時間経過とともに多くは回復  
していった. その中には, 回復過程の中で病識の定着とともにいったん左偏向を示  
す症例が存在したため, 病識の経過と病巣分析を加えて報告した.

29. 大松聡子, 高村優作, 藤井慎太郎, 森岡 周, 河島則天  
左右反転画像を用いた半側空間無視症状の定量的評価  
視覚科学フォーラム第 21 回研究会. 2017. 豊橋  
静止画像提示時の半側空間無視患者の視線特性とその回復過程に関して検討した.  
その結果, 無視患者は有意な視線の右偏向を認め, それらは発症からの時間経過と  
ともにほとんどは回復していった. 中には改善しない症例や, 病識の定着から左偏  
向を示す症例も存在し, 特徴的な症例に関して病巣分析も加えて報告した.
30. 大住倫弘, 西 祐樹, 住谷昌彦, 森岡 周  
ランダムノイズ振動刺激が 高齢者の手指巧緻性を改善させる  
第 25 回日本物理療法学会学術大会. 2017. 奈良  
感覚閾値以下のランダムノイズ振動刺激が高齢者の手指巧緻性の向上をもたらす  
ことを確認した. 体性感覚閾値以下での刺激強度でも効果が認められることから,  
対象者の負担が少ない物理療法となることが示唆される.
31. 植田耕造, 愛知 諒, 光武 翼  
歩行時に前脛骨筋の持続的な筋活動を認めた慢性期左片麻痺一症例に  
対する振動刺激, 電気刺激を用いた介入の試み  
第 25 回日本物理療法学会学術大会. 2017. 奈良  
歩行時に麻痺側の前脛骨筋の持続的な筋活動を認めた慢性期の片麻痺一症例に対  
し, 前脛骨筋への振動刺激や電気刺激療法を用いた介入を行った. 結果として, 歩  
行時の持続的な前脛骨筋の活動は軽減し, 内側腓腹筋の活動を認めた. また, 足関  
節背屈の運動麻痺の改善, 筋緊張亢進の改善を認めた.
32. 藤井慎太郎, 生野公貴, 中村潤二, 高村優作, 大松聡子, 森岡 周,  
河島則天  
半側空間無視に対する視覚刺激課題と経頭蓋直流電気刺激の併用介入  
—腹側注意ネットワークへの新たな治療戦略の検討—  
第 25 回日本物理療法学会学術大会. 2017. 奈良  
半側空間無視 (USN) における, 腹側注意ネットワークの賦活を企図した新たな  
視覚刺激課題と経頭蓋直流電気刺激(tDCS)の併用介入を考案し, その効果を検証  
した. その結果, 視覚刺激課題と tDCS の併用介入は特に受動的注意における左空  
間の反応性を向上させ, 腹側注意ネットワークの機能低下によって生じていたと  
思われる生活場面での USN 症状を軽減させる可能性が考えられた.

33. 林田一輝, 西 祐樹, 大住倫弘, 森岡 周  
他者との目的共有が運動主体感と運動学習に及ぼす影響  
第 41 回日本神経心理学会学術集会. 2017. 東京  
目的共有によって生じる運動主体感が運動学習効果に関連するという仮説を立て, 運動主体感を定量的に評価する手続きである **intentional binding** 課題を作成し, その仮説を検証した. その結果, 目的共有によって運動主体感を運動学習効果が促進されることが示唆された.
34. 岡田洋平, 萬 礼応, 福本貴彦, 青山朋樹, 高橋正樹  
パーキンソン病患者における方向転換動作の特性の解明  
—Laser 計測システムを用いて—  
第 11 回パーキンソン病・運動疾患コンGRESS. 2017. 東京  
パーキンソン病患者の方向転換動作を Laser 計測システムを用いて評価した結果, パーキンソン病患者は健常者と比較して小さい回転半径で方向転換する傾向にあり, その傾向が強い者ほど歩行転換時の歩幅の減少率が高いことを明らかにした.
35. 植田耕造, 光吉俊之, 久保洋平, 平田愛理, 早瀬裕之, 中山菜々華,  
宮下 創, 山内 純, 光武 翼, 岡田洋平, 森岡 周  
Lateropulsion 症例における自覚的視性垂直位の傾斜方向、転倒方向、  
頸部側屈方向の関係性の調査 -後ろ向き研究-  
第 57 回近畿理学療法学会学術大会. 2017. 大津  
Lateropulsion 症例の自覚的視性垂直位の傾斜歩行と立位時の転倒方向, 立位時の  
頸部側屈方向の関係性を後ろ向きに調査した. 結果, 自覚的視性垂直位と立位時の  
頸部側屈方向は 5 症例全例で反対方向を示した. 立位時の転倒方向と頸部側屈方  
向は 3 症例が反対方向, 2 症例が同方向であり, 同方向であった 2 症例は姿勢制御  
障害が強い症例であった. 前庭障害を頸部で代償している可能性が示唆された.
36. 信迫悟志, 嶋田総太郎, 坂井理美, 辻本多恵子, 首藤隆志, 浅野大喜,  
古川恵美, 大住倫弘, 中井昭夫, 森岡 周  
内部モデルにおける視覚-運動時間的統合の発達変化  
第 18 回日本認知神経リハビリテーション学会学術集会. 2017. 札幌  
4 歳-15 歳の子どもたちの視覚-運動時間的統合機能の発達変化について調査した  
結果を報告した.

37. 大松聡子, 高村優作, 河野正志, 河島則天  
半側空間無視症例に対する発動性惹起と左空間探索の手がかりとしての情動喚起画像の活用 (第2報)  
第18回 認知神経リハビリテーション学会学術集会. 2017. 札幌  
脳卒中後に発動性低下を含む前頭葉機能障害を中心とし受動的注意障害の低下を認めた男性無視症例に対し性関連画像を選定し介入を試みた. その結果, 視線右偏向の軽減や探索距離増大など良好な結果が得られたことを報告した.
38. 田中 創, 西上智彦, 今井亮太, 森岡 周  
変形性膝関節症に対する理学療法による能力障害の改善に影響する要因 —痛み関連因子の経時的変化に着目して—  
第10回 日本運動器疼痛学会. 2017. 福島  
能力障害の改善効果量に痛み関連要因がどのように影響するかを調査した. その結果, 膝 OA における能力障害が改善している症例では, 疼痛強度や破局的思考が早期に改善していた. また, 理学療法開始時に強い自己身体知覚異常があり, それが継続していると, 5 ヶ月後に能力障害が十分に改善しない可能性が示唆された.
39. 今井亮太, 大住倫弘, 森岡 周  
橈骨遠位端骨折術後患者が示す恐怖や運動の躊躇の客観的評価  
第10回 日本運動器疼痛学会. 2017. 福島  
本研究では, 術後患者が示す運動の躊躇を Finger Tapping Task (FTT) を用いて運動学的に評価し, 痛みや運動に対する恐怖心を客観的かつ定量化するとともに, それぞれの回復過程の関係を明らかにすることを目的とした. その結果, 術後早期段階では主観的恐怖心と運動の躊躇の間には密接な関係が認められたが, それぞれの回復過程は一致しなかった. このことから, 痛みに関する心理面の紙面評価と実際の運動の改善プロセスには解離があることが示唆された.
40. 重藤隼人, 大住倫弘, 森岡 周  
徒手牽引が有する鎮痛効果および関連する個人要因の検証 —信号検出理論・パス解析モデルを用いた触刺激との比較—  
第10回 日本運動器疼痛学会. 2017.  
徒手牽引に鎮痛効果について信号検出理論を用いて徒手刺激に特異的なものか個人バイアスによるものかを鑑別した上で, 鎮痛効果を触刺激と比較し, その結果, 徒手牽引は A $\delta$  線維由来の痛みに対してバイアスよりも刺激由来の鎮痛効果の影響を受け, 徒手牽引そのものによる影響と性格特性の影響のどちらも受けることが示唆された.

41. 大松聡子, 高村優作, 藤井慎太郎, 森岡周, 河島則天  
半側空間無視に対する選択反応課題と視線分析を用いた新たな評価手法の開発  
第7回ロボットリハビリテーション・ケア研究大会. 2017. 博多  
USNの病態や行動の特性を評価するうえで, 既存の評価に加えて能動的/受動的という2つの空間性注意に焦点を当てることが重要であることを症例の経過を通じて報告した.
42. 高村優作, 今西麻帆, 大坂まどか, 大松聡子, 森岡周, 河島則天  
半側空間無視の回復過程における机上検査と生活場面の乖離について  
第19回大阪病院学会. 2017. 大阪  
半側空間無視症例の中には机上検査上で無視症状を認めていないにも関わらず日常生活動作において無視症状が認められる症例が存在しており, このような症例では能動的注意による代償が可能であるが前頭葉の過活動を伴う場合があり易疲労性などの原因となる可能性があることを示した.
43. 植田耕造, 光吉俊之, 久保洋平, 平田愛理, 早瀬裕之, 中山菜々華, 宮下創, 山内純, 光武翼, 岡田洋平, 森岡周  
Lateropulsion 症例における自覚的視性垂直位の傾斜方向、転倒方向、頸部側屈方向の関係性の調査 —後ろ向き研究—  
第57回近畿理学療法学会. 2017. 滋賀  
Lateropulsion 症例の自覚的視性垂直位の傾斜方向と転倒方向, 頸部側屈方向の関係性を後ろ向きに調査した. その結果, 対象となった5症例全員が頸部側屈方向と自覚的視性垂直位の傾斜方向は反対方向であった. 転倒方向と頸部側屈方向は同方向が2例, 反対方向が3例であり, 転倒方向と自覚的視性垂直位の傾斜方向は同方向が3例, 反対方向が2例であった. Lateropulsion 症例における代償戦略が姿勢制御障害の重症度により異なる可能性が考えられた.
44. 石垣智也, 森岡周  
身体接触を介した暗黙的な二者間姿勢協調とラポールとの関係  
日本基礎心理学会 第36回大会. 2017. 大阪  
相互で指先を用いた軽い身体接触を行うことで示される暗黙的な二者間姿勢協調(身体同調)が, ラポールと関係するのかを検討した. 階層線形モデリングにて姿勢協調とラポールとの関係を分析した結果, 両変数間には正の関係が示された. これより, 身体接触を介した暗黙的な二者間姿勢協調を変調する機能として, 社会心理学的要因であるラポールが関与していることが明らかとなった.

45. 林田一輝、西 祐樹、大住倫弘、森岡 周  
他者との目的共有が行為主体感と運動パフォーマンスに及ぼす影響  
日本基礎心理学会 第 36 回大会. 2017. 大阪  
目的共有によって生じる運動主体感が運動学習効果に関連するという仮説を立て、  
運動主体感を定量的に評価する手続きである **intentional binding** 課題を作成し、  
その仮説を検証した。その結果、目的共有によって運動主体感を運動学習効果が促  
進されることが示唆された。
46. 大松聡子、高村優作、藤井慎太郎、森岡 周、河島則天  
異なる構成要素からなる動画を用いた半側空間無視の定量的評価  
第 41 回日本高次脳機能障害学会学術集会. 2017. 大宮  
動画提示時の半側空間無視患者の視線特性に関する検討に加え、健常高齢者の視  
線計測を通じて動画自体の特性に関しても合わせて検討した。サッカーや視線  
移動距離、速度比などの変数から動画が特徴づけられた。無視症例は、サッカー  
が誘発されやすい動作において、無視のない症例と比較し有意に回数や閾値が軽  
減しているものの、画像特性に応じた視線の変動は無視なし群と類似していたこ  
とを報告した。
47. 高村優作、藤井慎太郎、大松聡子、今西麻帆、生野公貴、田中幸平、  
万治淳史、阿部浩明、森岡 周、河島則天  
半側空間無視の諸症状と責任病巣の関連性  
ーデータベースから抽出した典型症例の症状・病巣比較ー  
第 41 回日本高次脳機能障害学会学術集会. 2017. 大宮  
半側空間無視の病態を空間性注意機能および非空間性注意機能の双方から包括的  
に評価した結果から、特徴的な無視症状を示した症例を抽出し、各症例の特性につ  
いて分析した。
48. 高村優作、藤井慎太郎、大松聡子、今西麻帆、生野公貴、田中幸平、  
万治淳史、阿部浩明、森岡 周、河島則天  
半側空間無視のサブタイプ分類  
ー行動評価結果のクラスター分析と脳画像分析を用いてー  
第 41 回日本高次脳機能障害学会学術集会. 2017. 大宮  
半側空間無視の病態を空間性注意機能および非空間性注意機能の双方から包括的  
に評価し、無視症状を発現させる機序の多様性について多変量解析手法を用いた  
サブタイプ分類を行った結果ならびに脳画像分析により責任領域を分析した結果  
を報告した。

49. 藤井慎太郎, 高村優作, 大松聡子, 生野公貴, 田中幸平, 万治淳史, 阿部浩明, 森岡 周, 河島則天  
半側空間無視における反応時間の空間分布特性—注意障害と無視症状の関連性と回復特性における脳損傷領域の検討—  
第 41 回日本高次脳機能障害学会学術集会. 2017. 大宮  
半側空間無視症例における注意障害と無視症状の関係性と回復特性および脳損傷領域について検討した. クラスター分析により注意機能と無視症状の関係性は 4 群に分類された. 脳画像分析により, 無視症状を認めていた群では側頭葉から後部頭頂葉の損傷を認め, 加えて注意障害の合併を認めた群では前頭葉深部白質損傷を認めたことから, 同領域の損傷が注意障害の随伴および無視症状の慢性化に関与することが示唆された.
50. 信迫悟志, 嶋田総太郎, 中井昭夫, 森岡周  
小児期の微細運動機能と視覚-運動時間的統合能力との関係性  
日本発達神経科学学会第 6 回学術集会. 2017. 大阪  
136 名の定型発達児を対象に, 微細運動スキルと感覚運動統合能力との関連性を調査した. 微細運動スキルの発達は, 年齢とは独立して, 感覚運動統合能力の発達変化に貢献していることが示された.
51. 大住倫弘, 住谷昌彦, 阿部博昭, 大竹祐子, 森岡 周  
化学療法誘発性末梢神経障害が手指つまみ動作のスムーズさを阻害する—運動学的分析を用いて—  
第 2 回がん理学療法カンファレンス. 2018. 神戸  
化学療法誘発性末梢神経障害を有する症例グループの手指巧緻運動を 3 次元的に分析し, 運動のスムーズさと痺れや感覚障害との相関関係が認められることを明らかにした.
52. 今井亮太, 大住倫弘, 石垣智也, 児玉隆之, 森岡周  
橈骨遠位端骨折術後患者が示す腱振動刺激による運動錯覚時の脳活動  
第 5 回身体性システム領域会議. 2018. 霧島  
橈骨遠位端骨折術後患者に腱振動刺激による運動錯覚を惹起させることで, 痛みの軽減のみならず手関節の運動機能の改善することを明らかにした. しかしながら, 鎮痛メカニズムは不明なため, 本研究では, 振動刺激による運動錯覚の鎮痛効果に関与する神経活動を脳波を用いて調査した. 結果, 感覚運動関連領域の興奮の程度と錯覚強との関係性が確認された.

53. 大住倫弘, 信迫悟志, 横谷菜帆, 座間拓郎, 嶋田総太郎, 前田貴記,  
森岡 周  
運動主体感を許容する遅延時間  
ー感覚フィードバックの遅延時間の検討ー  
第5回身体性システム領域会議. 2018. 霧島  
感覚ー運動統合機能と運動主体感との関係について実験的に調査し, 両者に有意  
な相関関係があることを確認した.
54. 信迫悟志, 高村優作, 石橋凜太郎, 座間拓郎, 大住倫弘, 嶋田総太郎,  
森岡 周  
失行と視覚-運動統合障害の Voxel-based lesion-symptom mapping  
第5回身体性システム領域会議. 2018. 霧島  
失行症状と関連している視覚ー運動統合機能障害に原因となる損傷脳領域を  
Voxel-based lesion-symptom mapping で特定した.